本だな

吉野正敏著

雪と生活

大明堂，1988年5月刊
B6判，213頁，1,800円

あとがきによると，本書は1979年秋，日本地理学会の大会の折り開かれた，「雪と生活」と題するシンポジウムが背景となり，編者が中心となって作られた著書である．したがって，それがくっきりと内容に現われている．目次を要約するとつぎのとおりである．

日本人と雪　吉野　正敏
Ⅰ．雪の気候
日本における雪の分布　設楽　寛
積雪と小地形　福岡　義隆
都市の雪害　東浦　将夫
山地の積雪　吉田　義信
Ⅱ．雪と生活
雪とのかかわりの時代的変遷　矢ヶ崎孝雄
社会変動と積雪の意義　大石　堪山
雪と工業　板倉　勝高
深雪地帯と家屋構造　氏家　武

Ⅰは雪の気候学的な面を述べたものであり，その物理的な性質，雪物理学的な面はほとんどふれられていない．また，北陸の雪が中心で，北海道の雪については，あまりふれられていない．しかし，多くの文献，図表などものせられており，雪の気候を学ぶのにはよい参考となると思う．

Ⅱでは，雪と社会との関連が，時代とともに変わって来ていることを述べたものが興味をそそられた．そして，ここでは雪の降り方は今も昔も変わりはなく，雪が社会へ与える影響が時代とともに変って来ているのは，人間の対応の技術の進歩によるものであるという見解をとっている．これは一つの見解であり，確かにそれが中心ではあるが，雪の降り方にも時代変化はあり，それが社会に及ぼす影響があることも否定出来ないと思う．

このように，部分的に多少の異論がないわけではないが，社会における雪の問題を学ぶにはよい，一つの教養書であると思う．　（高橋浩一郎）

情報File

NSF（全米科学財団）とNOAA（米国海洋大気庁），短時間予報から延長予報に関する共同研究プログラムを発足

このプロジェクトは，現業用の数値モデルを使うと有効な基礎的な研究を行っている大学の研究者や，予報に役立つような研究を行っている大学の研究者に，現業用のシステムを利用出来る機会を提供しようとするものである．

省庁の壁ばかり厚く，発生している問題に対し有効な対策をとれないでいる日本の状況を考えてみると，少し難しい感じがする次第である（もちろん，実体はどうなっているか分らないが）．　（住）